

夏大豆と秋大豆における青刈収量の比較 (第1報)

広 瀬 季 玄

HIROSE, T. Comparison of Green Yield of Summer-type Soybean with Autumn-type one for Green Manure (I)

従来青刈大豆としては秋大豆が適するとされているが、一部地帯の慣行には夏大豆を用いる所があり、また最近では北海道産の夏大豆型品種がかなり栽培されている状況にあるので、夏大豆と秋大豆の青刈収量を、刈取時期との関係において再検討してみた。

材料及び方法 水田裏作で畦巾6尺の小麦畦の両肩

第1表 生育調査成績

採取月日	主 茎 長			分 枝 数			
	16/Ⅴ	23/Ⅴ	30/Ⅴ	16/Ⅴ	23/Ⅴ	30/Ⅴ	
二本立区	春日在来	37.5	45.8	48.2	0.5	2.2	3.3
	松浦生	37.2	45.3	54.5	0	1.2	2.8
	生娘	39.9	44.5	55.3	0	1.3	2.2
	秋大豆2号	30.7	38.7	48.6	0	0.5	1.2
	ホウギョク	41.7	52.7	59.0	0.2	1.2	2.5
茶千石9号	29.7	36.9	51.7	0	1.2	2.2	
反当三五升区	春日在来	39.5	45.0	49.7	0.3	2.3	2.7
	松浦生	41.0	52.8	62.4	0	1.9	2.3
	生娘	40.3	49.2	62.8	0	0.5	3.0
	秋大豆2号	39.8	47.8	55.7	0	0	0
	ホウギョク	42.8	56.6	63.8	0	0.3	1.7
茶千石9号	36.0	48.6	61.7	0	0.2	0.5	

に夏大豆の春日在来、松浦、生娘と秋大豆の秋大豆2号、ホウギョク、茶千石9号の6品種を用い、株間5寸2本立区と反当3.5升播種区を設けた。肥料は反当堆肥200貫を基肥とし、4月11日に播種、収量調査は6月16日、6月23日、6月30日の3回に行つた。試験区は4.8坪の1区制とした。なお株間5寸2本立区の換算反当播種量は春日在来1.56升、松浦1.63升、生娘1.89升、秋大豆2号1.45升、ホウギョク2.45升、茶千石9号1.28升である。

成績 反当生草収量についてみると第2表の通りで2本立区では第1回及び第2回では夏大豆と秋大豆の間に大差が認められず、第3回では生長量の大きい秋大豆が夏大豆を追いこし明らかに秋大豆が多くなる。次に3.5升区についてみると第1回目ではまだ品種によつて夏大豆と秋大豆が同程度の収量を示す場合もあるが第2回以降では明らかに夏大豆は秋大豆より劣つてくる。乾物重は両区とも生草重と同傾向を示した。3.5升区の第3回収穫物を分析した結果窒素含有率は

第2表 収 量 調 査 成 績

採取月日	反 当 生 草 収 量						乾物の窒素含有率	反当窒素生産量
	2 本 立 区			反 当 3.5 升 区				
	16/Ⅴ	23/Ⅴ	30/Ⅴ	16/Ⅴ	23/Ⅴ	30/Ⅴ	30/Ⅴ	30/Ⅴ
春日在来	225	473	754	446	604	908	2.98	5.33
松浦生	308	446	634	476	581	851	2.65	4.39
生娘	255	420	701	375	514	799	2.73	4.24
秋大豆2号	353	529	1058	656	836	1260	2.87	6.95
ホウギョク	439	653	1159	593	1001	1309	3.01	7.19
茶千石9号	210	386	990	638	919	1440	2.62	6.89

備考 窒素含有率及び窒素生産量は3.5升区収穫物についての調査。

* 佐賀縣農業試験場

各品種間に大差がないので、反当窒素生産量も同じ傾向を示す。第1表にしめしてあるように2本立区における第1回及び第2回刈取の場合、分枝はそれほど収量においてしめる比重は大きくなく、主として主稈葉重にもとづくものと考えられ、これはまた粒の大小によつて影響されることが大きい傾向がみられ、結局初期生育は夏大豆・秋大豆という生態型よりもむしろ

粒の大小によつて支配される面が強いようである。3.5升区と畦巾6尺株間5寸2本立区との間に若干の差異はあるが、要するに6月上旬ころまでの刈取では秋大豆が常にまさるとは必ずしもいいきれないが、中下旬以後の刈取では明らかに秋大豆がまさるといつてよいように思われる。